

反科学ティーパーティー運動に要注意

Science scorned

2010年9月9日号 Vol. 467 (133)

経済的苦境にある米国で、保守派の間に反科学的傾向が広がっている。その典型がティーパーティー運動だ。それでも、大多数の米国民は科学に対して強い信頼感を寄せている。

「この世界には、政府、大学、科学、メディアという四大欺瞞・ペテンが存在しています。墮落したこれら4機関は、まさにその欺瞞性ゆえに存在しています。それはまた彼らが存在を誇示するやり口であり、彼らが繁栄している理由でもあるのです」。この過激な発言は、米国の保守派ラジオ番組の司会者 Rush Limbaugh によるものだ。こんな発言や言葉のまやかしに満ちた放送内容など一笑に付したいところだが、Limbaugh や同類の意見は、笑い事ですますことはできない。

米国の保守派は反科学的傾向を強めており、その社会的・政治的影響力が、環境問題や幹細胞研究など、数多くの方面で目に見える形で現れる可能性がある。

例えば9月初め、アラスカ州における上院中間選挙（11月2日）に向けた共和党の予備選挙が行われ、現職の Lisa Murkowski 議員が、政治的に無名の Joe Miller 候補に敗れる大波乱があった。Miller 候補は保守的な「ティーパーティー運動」の支援を受けており、Murkowski 議員が地球温暖化の現実を認めたことが、「彼女の交代が必要なことを示す最重要証拠物件だ」と断じた。

経済的に不安定な状況にある現在の米国において、保守派ポピュリズムが勢力を増している。彼らの多くは、反増税、反規制、反移民といった伝統的な保守派の主張をそのまま唱えている。しかし、ティーパーティー運動とその応援団は、エリートや専門家に対する

疑念という、米国民の昔ながらの政治的衝動をうまく利用している。この応援団には、Limbaugh をはじめ、Fox News 社のテレビ番組の司会者 Glenn Beck、ショウジョウバエの研究を公的資金の無駄遣いと非難したことで有名な Sarah Palin らが名を連ねている。

地球温暖化への過激な否定は、ティーパーティー運動が科学に対していかなる姿勢を取っているか、世間にはつきりと見せつける事件となった。例えば Limbaugh は、自分の番組で、「科学は、居場所のなくなった社会主義者と共産主義者の活動拠点となった」と語り、気候変動科学を「史上最大のペテン」とよんだ。

ティーパーティー運動はまた、ダーウィンの進化論、幹細胞研究、胚研究に対する宗教的反感という傾向を持ち合わせている。とりわけ Beck は、こうした研究を優生学思想と同一視している。

ティーパーティー運動は、科学的根拠に基づいた規制に対しても、政府が国民生活に立ち入るための言い訳ととらえており、嫌悪感を隠さない。

ブッシュ政権下における米国の科学政策は、軽視とイデオロギーという2つの面で困難に直面した。そこで「科学を正当な地位に戻す」というのがオバマ大統領の公約なのだが、「科学＝リベラル」という図式を人々に与えてしまったようで、保守派の格好の標的となっているわけだ。

米国民が直面している経済問題は、まさに現実のものである。

中国やその他の新興科学大国との競争が激化する中で、米国の将来は、教育、科学、技術に極めて大きな比重がかかっている。8月にはサルモネラ中毒のおそれから数億個の米国産鶏卵が回収された。また4月にはディープウォーター・ホライズンの原油流出事故も発生したが、こうした出来事は、米国政府に、科学に基づいた、より優れた規則を制定・実施し、国民のために行動する必要性を思い起こさせるよい機会となった。

しかし、米国民は、企業や企業が後援するシンクタンクや偽装団体が画策した反科学・反規制の行動計画を、単純に受け入れてしまうことが多いのもまた現実なのだ。

現在のような敵意に満ちた政治的雰囲気の中では、科学の擁護者が取りうる対処法は限られている。しかし心強いことに、世論調査では、圧倒的多数の米国民が、科学は世のため人のためになる力だと引き続き考えており、現在の科学に対する不平不満は一時的なものと考えられる。科学者は、教育者として、若い人々に合理主義、学問、批判的思考を奨励し、また、メディアや政治家とも手を携えて、現代の喫緊の科学的課題を明らかにするために一層の努力を払うべきである。 ■

(翻訳：菊川要)